

Tokyo. 22: 358-359. Stone, B. C. 1970. Balanophoraceae, in The flora of Guam. Micronesica 6: 261-262.

\* \* \* \*

Hansen (1972, 1982) は性表現の違いを識別点として *Balanophora fungosa* に 2 つの亜種を認め、それらの分布図を示した。Hansen によれば、狭義のリウキュウツチトリモチ subsp. *fungosa* は雌雄同株で雌花群の下に雄花群がつく両性花序を持ち、subsp. *indica* は雌雄異株であることにより区別される。ところが、石垣島において、1 本のオオバギに寄生する subsp. *fungosa* の集団の中に、通常の型と混じって数個の雄株が発見され (Fig. 1), 性表現だけでは 2 亜種が識別できないことが明らかとなった。そこで本論文では、両亜種の形態上の差異について再検討し、その結果に基づいて分布図を改訂した。これら 2 亜種は花序の大きさや雌花部の特徴では識別が困難であるが、雄花に付随する苞および雄花の花被片と雄ずい群の形状が次のように異なる。Subsp. *fungosa* の雄花には通常数個の、繊細な苞があり、花被片は楕円形で雄ずい群がほぼ球状であるのに対し、subsp. *indica* では、1 個の雄花に対応して 1 個の大型の苞があり、花被片は長楕円形で雄ずい群は楕円形である (図 2A, B)。分布域はボルネオを境としておおそ東西に分かれているが、ルソン島およびグェム島に subsp. *indica* とみなされるものが分布しているのが注目される。これらについては今後さらに検討することが必要と思われる。なお、台湾には最近まで本種の分布が知られていなかったが、恒春半島と蘭嶼に subsp. *fungosa* が生育していることが確認された。

□堀田 満(編): 京都・植物たちの物語 (古都の花と緑と作物) 272 pp. 1987. かもがわ出版, 京都. ¥2,000. 京都に見られる植物を紹介して解説したものである。平安時代の昔から日本の中心として文化のはぐくまれた所だから、そこで育成された蔬菜、果樹類が多く、それらが内容の大部分を占めている。聖護院カブ、壬生菜、スグキ、九条ネギ、丹波栗、北山スギなどよく知られたものや、聞いたことのない珍しいものもでくる。菜の花漬に利用するため、現在他所では無くなってしまった在来のアブラナが残っている等面白い記事もある。週刊誌「京都民報」に連載したものをまとめたものなので、一般向の内容になっていて、折角の伝統のある植物が軽く解説されているのは物足りない。椿の園芸化は京都で始まったもので、大徳寺の胡蝶佗助、地藏院の五色の散椿など多くの由緒ある古木があるし、石川丈山が愛したと言われる詩仙堂のサザンカなど、京都の歴史を物語るいろいろな植物がでてこないのは残念である。蔬菜、果樹類と花卉園芸品とは別の本にして書いたら、もっと内容の豊かなものになったろうと、折角の好企画が惜しまれる。B 6 判。 (山崎 敬)